

研究タイトル
タイ北部・ポスト狩猟採集民ムラブリにおける乳製品の受容過程と消費をめぐる現状と課題に関する人類学的研究
研究者名（所属先）
・二文字屋 脩（早稲田大学）

**【目的】**

本研究の目的は、タイ北部に暮らすポスト狩猟採集民ムラブリを事例に、乳製品が開発を通してどのように受容され、人びとのあいだでどのように消費されているのかを明らかにすることである。

**【方法】**

本研究の基本的な調査方法は、参与観察とインタビュー調査である。2018年4月末から5月初め（計7日間）、そして2019年1月末（計4日間）にナン県ウィアンサー郡に所在するファイ・ユアック村（約185人、2019年5月現在）を訪れ、20代から50代の男女を対象に、各年代から5人を選定してインタビュー調査を行なった。また上記の調査期間中に、現地の行政機関や研究機関で関連資料の収集を行い、タイにおける幼児・初等教育と乳製品の関係について文献史料を収集した。

**【結果】**

調査の結果、開発による市場経済化を通じた乳製品の導入とタイの全域で行われている学乳事業が、ムラブリを取り巻く乳製品の受容と消費に大きく関わっていることが明らかになった。しかし近代的教育を受けた若い世代には乳製品の栄養学的価値が広く認識されているが、乳製品が積極的に消費されているわけではない。以前は生もの全般に対する忌避感情から乳類を口にしてこなかったが、現在では人々の消費行動と経済的貧困が原因で乳製品が積極的に消費されているわけではないからである。実際、調査対象者14人のうち、乳製品を日常的に購入していたのはたったの2人であり、いずれも子供を持つ若い女性であった。このことから、乳製品の消費には、男女間による消費行動の差異、さらには年代間による栄養学的理解の差異が関わっていることが明らかとなった。

**【結論】**

栄養学的価値に一定の理解があるとはいえ、その消費はまだまだ活発的ではない。乳製品は嗜好品とも日常食とも言えない曖昧に位置づけにあるからだが、そうであるからこそ、乳製品の積極的な消費は、栄養学的知識と経済合理主義的消費行動の身体化を意味する。つまり乳製品の需要と消費は、開発が目指す脱狩猟採集民化の最終的な段階を判断する指標になる可能性をもつといえる。